

## [巻頭言]

## 事例報告論文を書きましょう

情報システム論文の作成および査読のありかた研究会主査  
原 潔

## はじめに

学会誌は、学会の顔ともいえるものです。その学会誌は、学会員の研究や実践成果を発表する場としての論文誌という役割と、有益な情報を入手・提供する場としての情報誌という二つの役割を担っています。

学会誌に多くの論文や記事が寄せられ、それらが活用されることが学会の活動が活発であることを示す一つの証になるだろうと思います。これまでの学会誌の内容をみると、社会に対する提言や社会が直面する問題への貢献などに関する情報発信は充実してきていると思えます。しかし論文誌の掲載実績からみると、研究論文の発表や利用に関してはまだまだ十分とは言えないのではないのでしょうか。論文の投稿数はそこそこあるようですがまだまだ十分とはいえず、また採択率が低いようです。その大きな要因として「情報システム」の定義が緩やかであるが故の論文の質の低さや査読者の視点の揺れがありそうです。

## 情報システム学の確立を目指して

情報システム学会（以下、本学会）はその目指すべき方向の一つに「これからの情報システムのあり方の追求」を挙げています。本学会では、情報システムを「組織体（または社会・個人）の活動に必要な情報の収集・蓄積・処理・伝達にかかわる仕組みである。広義には、人的機構と機械的機構からなる。コンピュータを中心とする機械的機構を重視したとき、これを狭義の情報システムと呼ぶ。しかし、このときそ

れが置かれる組織の活動となじみのとれているものでなければならぬ。」と定義しています。

組織体の活動に資する仕組みを研究対象にするがゆえに情報システム学の学問領域は、情報工学や社会学、経営学、認知学、心理学、教育学などの既存学問領域の学際的（interdisciplinary）なものになります。

しかし、組織体の活動が抱える問題が現実的なもので、ビジネスや人々の生活に密着したものであればあるほど、伝統的な理工学的アプローチ（科学的、論理的など）では解決つかないことが多くなってきます。組織体の活動においては、問題が解決できることが大事でその効果検証や理論付けは後でもよいのです。因果関係での意味づけより相関関係での意味づけの方が重宝され、ある特定の領域で用いることのできる実際の経験で見出されてきた知が活用される傾向が見られます。そこには検証を欠いたトピックスが一人歩きする危険があります。

このような傾向があるがゆえに情報システム学は、学際的（interdisciplinary）ではなく既存の学問領域を超越した学際的（transdisciplinary）な学問でなければならないのではないのでしょうか。

本学会では新しい情報システム学の確立を目指した取り組みが行なわれています。その端緒として書籍「新情報システム学序説」が発刊されました。これらを介して共通のよりどころとなる情報システム学が確立し、情報システムの研究方法や論文の書き方が今より共通に理解されていくようになると良いですね。

## 情報システム論文のありかた研究会

本学会の特徴として産業界からの会員の比率が高いということがあります。学術、技術上の研究成果を実用にも供するだけでなく、実用に

Kiyoshi Hara

日本ユニシス株式会社

Nihon Unisys, Ltd

[巻頭言] 2014年3月4日受付

©情報システム学会

供された情報システムの事例から解決すべき新たな学術、技術上の研究テーマが取り出さされて行くのが研究者と実務家との望ましい交流ではないかと思えます。そのために多くの情報システムの事例論文が集まることが必要です。特に産業界からの論文を期待する所以です。

情報システムの有用な知見は現場の事例に多く存在します。それらの有用な知見を論文として公開し、情報の共有を促進することにより国内の情報システム業界全体の活力向上に貢献できます。そのために産業界からの論文投稿を促進するための環境整備などを目的にした「産業界からの論文投稿を促進するための研究会」を、2006年に発足させ、その後、論文作成に関する経験が十分でないため論文の発表・蓄積に戸惑っている学会員が多々見られることから論文作成・発表のあり方を研究し、投稿者への支援の場を提供するために、「情報システム論文の作成を支援する研究会」を2009年に発足させました。さらに、査読者の視点からの取り組みも必要であると感じ、特に産業界からの論文投稿の促進を念頭に事例報告論文の論文作成・発表のあり方、査読のあり方を研究し、投稿者への支援の場を提供する「情報システム論文の作成および査読のありかた研究会」を2011年に発足させ活動を続けています。

### 情報システム論文の難しさ

すでに述べたように情報システムの研究対象は、システムの個別要素ではなく、人間も含めたシステム全体を視野に入れるので、情報システム論文においては、伝統的な理工学的アプローチが必ずしも適合しないことが多々あります。このため論文執筆者にも論文査読者にも論文に対する理解の揺れが生じているのではないのでしょうか。

個別的な体験を客観的事実として表明してもそれを実証するプロセスが困難です。観察データは必ずしも客観的とは言えないし、得られた結果を再現することも難しい。

また、事例報告論文とは何なのか、それが新しい技術または知識の集積に貢献するのはなぜなのかは自明ではありません。ある確率でしか起こらないものに対する、因果関係を推定する学問の代表として疫学があります。情報システム学を確立し、有効な事例報告論文を示すには参考になるものと思っています。研究会では、

事例報告論文のあり方の研究として質的評価と量的評価を合わせた混合法が情報システムの論文の構成にあうのではないかと議論を続けています。

本学会が、21世紀社会において健全な役割を果たしていくためには、組織の抱える課題を解決しながら事例報告論文を多く蓄積し、その蓄財で研究を進めながら情報システム学を確立していくことが重要だと思います。

事例報告論文をどんどん書いてください。執筆に際しては研究会がご支援できます。

### 研究会へのお誘い

論文投稿者を直接支援する相談会と、情報システム論文の作成と査読のあり方を研究する研究会を定期的で開催しています。また秋には良い情報システム論文の書き方のワークショップを開催しています。誰でも参加できる研究会・ワークショップですので気軽にご参加ください。